

村山槐多の挿絵六点、関連写真一枚（「テング非天狗壮快旅行記」）

● 出典

押川春浪・弓館小鰐・針重敬喜・水谷竹紫「テング非天狗壮快旅行記」（『武侠世界』第三卷第一〇号、武侠世界社、一九一四年九月一日、二〇～二七頁、表題と執筆者名は目次でも同じ表記になっている、写真撮影者不明「本稿五～六頁参照」、村山槐多挿絵「本稿三頁参照」）

● 寸法

二〇頁の写真 七・四〇×一三・五五センチメートル

二二頁の挿絵 約九・三〇×七・三〇センチメートル

二二頁の挿絵 八・七〇×七・六五センチメートル

二三頁の挿絵 約九・二〇×七・五五センチメートル

二四頁の挿絵 約九・五五×約七・七〇センチメートル

二五頁の挿絵 九・三〇×約七・四〇センチメートル

二六頁の挿絵 九・四〇×約七・四〇センチメートル

〔註〕

寸法を「約」としたものは、測りにくいため正確でない可能性がある。

●解説

『武侠世界』第三卷第一〇号に「テング非天狗壮快旅行記」という題の下に、押川春浪「(一) 耳の側で法螺貝ブーブ」(二〇～二二頁)、弓館小鰐「(二) 気味の悪いこと夥しい」(二二～二三頁)、針重敬喜「(三) 脚が地を離れぬ」(二三～二五頁)、水谷竹紫「(四) 春浪將軍の奇蹟」(二五～二七頁)が載っている。

この旅行については、「村山槐多の関連写真二枚（「本社主催壮快旅行」）^(註一)において詳しく述べている。表題の「テング非天狗」は、おそらく押川春浪がその中心人物であつたスポーツ社交団体「天狗俱樂部」^(註二)のメンバーと非メンバーを意味するのだろう。天狗俱樂部の

会員構成についてはよく分からないようなので、旅行の参加者の中で誰が天狗倶楽部のメンバーであったのかについては、本稿では触れないことにする。

押川春浪が旅行の初日（一九一四年八月六日）を、弓館小鰐（弓館芳夫）が二日目（七日）の早朝から小滝の坑道までを、針重敬喜が小滝の坑道を出てから二日目の終わりまでを、水谷竹紫が三日目（八日）をそれぞれ担当している。

六点の挿絵の作者は明記されていないが、いずれも「Kata」というサインが書き込まれており、村山槐多の手になるものである。どの挿絵も原画が現存するかどうかは不明であり、詳細な制作時期も分からないが、槐多の一九一四（大正三）年八月一九日の長谷部武二郎氏宛書簡の中に「来月の武俠世界にはその記事に僕が挿画を入れた、下らない仕事だが見て呉れたまひ。」とあるので、その日までには描かれていたと思われる。

二二頁の挿絵には「汽車中の春浪大将」と書かれている。この挿絵は初日を担当した押川春浪の旅行記に載っているので、おそらく初日の汽車の中での押川の姿を描いたものだろう。ただし、この旅行に三日目から参加した奥村二秋（奥村卯兵衛）がその日に日光で「電車」に乗ったところ、押川が車中にいたというので、その時の押川を描いた可能性も否定はできないかもしれない。また、帰りの汽車の中での押川を描いたものである可能性もあるだろう。しかし、いずれも槐多がその場に居合わせたかどうかは分からないので、一番考えられるのはやはり初日だということになるだろう。もともと、居合わせなくても想像で描いたということもありうるかもしれないが、実際に見た姿を描いたと考えるのが自然なのではなかろうか。したがって、この挿絵は初日の一九一四（大正三）年八月六日から一九日までの間に描かれたと考えるべきだろう。なお、この挿絵は、原田光編・構成「村山槐多年譜」において紹介されている。

二二頁の挿絵には「カップとカサとコザ」と書かれている。この挿絵は、雨の中を一行が歩いていく光景を描いたものかと思われるが、この旅行に参加した石川金五郎によれば、旅行中は毎日雨が降ったというので、^(註七) 一つの出来事を描いたのかは分からない。二日目の早朝から小滝の坑道までを担当した弓館小鰐の旅行記に載っている挿絵なので、その間の出来事を描いたのかもしれないが、詳細は不明である。したがって、この挿絵も初日の一九一四（大正三）年八月六日から一九日までの間に描かれたと考えるべきだろう。なお、この挿絵の右から二人目の人物は、同号四一頁の挿絵^(註八)に描かれている大村一蔵と服装が似ているため、彼である可能性があるが、帽子の形が少し違うので、別人かもしれない。

二三頁の挿絵には「庚申山の天狗逃げ出す」と書かれている。「庚申山」とあるので、初日か二日目のことを描いたものということになるが、参加者が書いた旅行記と感想文の中に「庚申山の天狗言についての記述はないので、それ以上詳しいことは分からない。したがって、この挿絵も初日の一九一四（大正三）年八月六日から一九日までの間に描かれたと考えるべきだろう。挿絵の左下に描かれている旗の「TNG」という文字は天狗俱樂部の「天狗」を意味すると思われるが、水谷竹紫によれば、三日目に一行は「今日は緋羅紗の天狗旗まで押し立てゝ」歩いたという。^(註九) しかし、挿絵の旗は初日か二日目に立てられたものなので、それとは別のものだということになるのだろう。

二四頁の挿絵には「足尾坑内にて弓館ダイナマイトの音に青くなる」と書かれている。一行が「足尾坑内」（小滝の坑内）に入ったのは二日目のことなので、この挿絵は一九一四（大正三）年八月七日から一九日までの間に描かれたということになる。この出来事については、弓館小鰐本人も「頭でズドンとハツパをやられた時は胆斗の如き小生も流石にヒヤリとした。」と書いて^(註一〇)いる。二六頁の挿絵に弓館と針重敬喜がジャンケンをしている姿が描かれているが、右側の眼鏡をかけた人物は二四頁の挿絵の眼鏡をかけた人物と風貌

が似ている。したがって、両方の挿絵において、眼鏡をかけた人物が弓館だろうと推測できる。二四頁の挿絵の中で、弓館と思われる人物の頭上に手から何かを提げた人物がいるので、もしかしたらこの人物が持っているものがダイナマイトであるのかもしれないが、これは右端の人物が持っている照明と似ているので、照明である可能性の方が高いかと考えられるが、詳細は不明である。

二五頁の挿絵には「中禅寺湖見ゆ」と書かれている。一行が中禅寺湖にいたのは二日目と三日目であるが、「中禅寺湖見ゆ」という文面から判断すると、二日目に中禅寺湖に辿り着いて湖を見た場面を描いたものである可能性が高いのではなからうか。この挿絵も一九一四（大正三）年八月七日から一九日までの間に描かれたと考えるのが適切だろう。

二六頁の挿絵には「弓館対針重ジャンケン」と書かれている。針重敬喜の旅行記によれば、弓館小鰐と針重がジャンケンをしたのは二日目に泊まった宿屋においてであるので、（註一一）

二日目か三日目の出来事だということになるが、二日目を担当した針重の旅行記の末尾にそのことが書かれていることから判断すると、二日目の出来事だと考えるのが自然だろう。したがって、この挿絵も一九一四（大正三）年八月七日から一九日までの間に描かれたのだろうということになる。ジャンケンをしている二人のうち、右側の眼鏡をかけた人物が弓館だと思われることは二四頁の挿絵の解説において既に触れた。よって、左側の人物が針重だろう。

二〇頁の写真「日光白雲の滝に於ける一行」は、三日目（一九一四年八月八日）に撮影されたと思われる。参加者が書いた旅行記と感想文の中に白雲の滝への言及はないが、この滝は華厳の滝の近くにあるものである。一行が華厳の滝を見たのは三日目なので、白雲（註一二）の滝を訪れたのも同じ日だと考えられる。写真の撮影者は無表記なので不明だが、もしか

したら大村一蔵であるのかもしれない。^(註一三)この写真には槐多が写っている可能性があるが、各人の顔がよく見えないので、詳細は不明である。

なお、押川春浪の旅行記において、小杉未醒の発言が引用されている。^(註一四)小杉の著作権はまだ保護期間が終了していないが、これは発言の内容を正確に伝えるインタビューなどではなく、後になってから押川が引用したもので、発言の内容をどこまで正確に伝えているのかは分らず、実際の発言とは細部において異同がある可能性がある。また、商業的に利用しているのではなく、あくまで研究目的で引用しているので、引用しても著作権の侵害にはならないと判断したが、もし著作権者が掲載中止を希望される場合には、ご連絡いただければ適切に対応させていただく。

執筆者・発行者 植田智晴

二〇一三年二月二〇日 初稿発行

二〇一三年六月二二日 第二稿発行

二〇一三年二月一七日 第三稿発行

二〇一三年二月一七日 第四稿発行

© UEDA Tomoharu 2013-2023

この PDF の無断での転載、複製などは禁止とさせていただきます。